

東日本大震災復興支援事業東北応援ツアーに参加して、
参加者名:佃 れい子 卒業年度 1968 年、文学部、英文科

今回参加して、心に強く響いたのは 2011 年 3 月 11 日からほぼ 3 年余り時が経過しているにもかかわらず、私を見た限りでは、復興がかなり遅いように思いました。例えば、女川市は、2メートル近く町全体をかさ上げしなければならないということで、そこここにブルドーザーや、大きな機材が活動していましたが、まだまだ完成には程遠いのではないかと、感じました。あれほどの考えられないくらいの被害を受けたのですから、当然と言えば、当然のことではあります、まだまだ道遠しという感がありました。

もちろん、働いていらっしゃる当事者の方々は真剣に毎日の作業をこなしておられることは、良く理解できますが、もっと、もっと人が入っていても良いのではないかと、感じました。無論、土日に我々はお尋ねさせて戴いたのですが、もっと、仕事の条件を有利にして、国からのバックアップももっと、もっとあっても良いのではないかと感じました。

次に、訪ねたゆりあげ町は、広大な更地に夏の名ごりでしょうかセイタカアワダチソウが辺り一面に、風にゆらゆらなびいて、まるで何事も無かったかのような風情で、衝撃を受けました。

私どものバスが時速 15 キロくらいで、ゆっくり、本通りを行く間、あちこちに祭壇が設けられていて、三々五々に一かたまりのご家族の方々でしょうか、あるいは、同じ町内の人々同士でしょうか、しめやかに花を祭壇に手向けたり、静かにお話をされているようでした。

その様子を遠くバスから眺めている自分がその方達のお気持ちを思うと、何ともやるせない気持ちになりました。

その日が 11 日だったので、亡くなられた方達の余目なのでしょうか。何とも、言いようのない悲しい様子がこちらにも伝わってきました。しばし、私も静かにそうっと手を合わさせてもらいました。

私が思いますのに、3 年がたった今こそが、スタートなのではないかと思いました。人間はどうしても、辛い過去を乗り越えて前に進まなければと自身を励ますという、自然のカ、立ち直りの力が備わっていますが、災害に合われて一時は再起不能になりかけたその地獄のような苦悶の末、やはり前を見据えて頑張って行こうとするには、周りの被害を受けた方達、及びそのような目に実際合わなかった人々も含めて、その立場の人々に寄り添い、出来ることからやるより方法がないなあと自ら強く感じました。

私も、何も出来ない自分が歯がゆく、何か出来ないか、何かできないか、と考えめぐねて、ある行動にたどり着きました。具体的に述べますと、何もできない自分ではありますが、被災者さんの講演会でとても印象に残った言葉が「私たちのことを忘れないで下さい。この大災害が次第に風化していくのを一番危惧しています。」という訴えのお言葉でした。

それで、自分は菓子作りが好きです。ですので「そうだ 1 毎月、クッキーを作っておくろ う!!」と決め、今で8カ月が経過しています。自分としては、なかなか長続きの出来ない性格なので、毎月 11 日に自家製のクッキーをつくり、翌日に発送という段取りにしていますが、これをし続けられるだろうかとはなはだ疑問視していました。

この行為は、4 月から始めましたが、「夏までを目標に。。。そして夏が過ぎれば秋まで、そしてクリスマスまで。。。」と自ら目標を立てて、祈りながら、送り続けています。まあまあ、継続が出来たのはやはり何かをなさなければならないという気持ちがあったからではないかと今にして思います。

ホント、大したことではないのですが、被災地の人々の一人でも、二人でもここ京都の肩隅にささやかですが、寄り添って、思いを馳せて居る者がいますよ。というちいちゃな意思表示になるかなと思ってのことです。

できるところから、出来ることを、少しずつ行っていきたいと思っています。

この行事に参加したのも、以上のような理由と、事実参加した結果、新たな目覚めを与えてくれました。つまり、現場を実際に見せて戴くことで、改めて震災の酷さ、原子力発電の、脆弱さを知りました。

これからも、意識して、考えて暮らして行こうと思いました。

終わり